

腫瘍内科

■ スタッフ（項目見出しスタイル）

科長	片山直之	
副科長	水野聡朗	
医師数	常勤	3名
	併任	3名
	非常勤	0名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 腫瘍内科とは

がんに対する治療には、外科治療、薬物療法、放射線治療、内視鏡的治療などがあります。腫瘍内科とは、化学療法などを含むがん薬物療法を専門的に行う診療科です。腫瘍内科の主な役割については、下記のようにまとめることができます。

1. 各がん種に対して、根拠（エビデンス）に基づいた標準的治療の実践
2. 個別化治療の実践：病気の種類・性質・進行度などに応じ、個々の患者さんに最も適した治療を提供する。
3. 新規治療の開発：臨床試験、トランスレーショナルリサーチを実践し、新しい治療法の研究開発を行う。
4. 生活の質（Quality of Life: QOL）の改善：腫瘍関連症状や化学療法の副作用の軽減に努める。
5. 治療相談：専門外来、セカンド・オピニオン等を通じて標準的治療に関する相談のほか、臨床試験等の情報提供を行う。

2. 主な診療対象疾患

・乳癌
薬物療法は、乳癌においてはますます重要な存在となってきました。早期例、進行例など病期に応じて下記のような薬物治療を実践しています。

- ・乳房温存などを目的とした術前化学療法
- ・再発予防を目的とした手術後の薬物療法
- ・転移再発乳がんに対する薬物療法
- ・消化管腫瘍(胃癌、食道癌、大腸癌)
当科では、切除不能な進行例に対して化学療法を

実施しています。また食道癌におきましては、放射線治療科との連携により化学放射線治療も実施しております。

- ・原発不明癌
発症頻度は10%未満と少ないものの、診断・治療方針に難渋する場合があります。薬物療法においては、腫瘍の性質に応じた薬剤選択により治療効果の向上に努めております。

- ・胚細胞腫瘍(性腺外)
進行例であっても適切な化学療法とそれに続く手術により治癒が期待できる腫瘍であり、外科(泌尿器科、胸部外科)とも緊密に連携して、当科でも積極的に取り組んでいます。

- ・成人軟部腫瘍
この領域において新規抗癌剤が導入され、薬物療法の選択肢・役割も以前よりまっています。整形外科等と共同で治験含めた薬物療法実践しています。

■ 診療体制と実績

我々のグループでは、がん薬物療法専門医を含むスタッフが診療・研究に従事しております。三重県下にはがん薬物療法専門医が13名(2015年2月現在)しかおりませんが、そのうち5名(1名留学中)が当科に所属しております。

いずれのがん種においても、他の診療科と緊密に連携して、病期に応じて手術・薬物療法・放射線療法を含む集学的治療を実施しております。

当科で患者数が多い乳癌においては、乳腺センターと放射線治療科と連携し、病期・腫瘍の性状に応じて化学療法、内分泌療法、分子標的治療薬などの薬物治療を実践しています。

また、食道癌においては、消化管外科、放射線治療科と連携して、術前・術後治療、放射線化学療法など治療の最適化に努めています。

■ 診療内容の特色と治療実績

化学療法を含む薬物療法は、QOLの観点からも現在多くが外来治療として実施されております。当科の年間の外化学療法件数は2000件を超えております。病院全体の外来化学療法件数の約3分の1を当科が実施していることとなります。化学療法を外来で安全に実施するためには、副作用管理が非常に重要になります。当科では副作用の管理において独自の取り組みにより、より安全でQOLの高い外来治療の提供を目指しています。

■ 臨床研究等の実績

研究面におきましては、主に臨床研究を通じて、新たな治療の開発、治療の副作用対策の研究、腫瘍の予後・予測因子についての研究などに取り組んでおります。

① 新規治療の開発

当科および関連施設では、既存の治療に抵抗性の難治性がんの癌に対して、新規治療の開発を目指して化学療法、分子標的治療、遺伝子治療、免疫療法等の各種臨床試験、臨床研究を行っております。

② 予後・予測因子の研究

病気の見通し（予後因子）に関する研究や、どのような薬が効きやすいのか（予測因子）、こうした研究は治療の個別化にとって重要な研究です。新しい治療の開発とともに当科も積極的に取り組んでいます。

③ 遺伝子異常に基づくがんの個別化治療

近年の急速な診断技術の発展により、個々の患者さんについてがん細胞の遺伝子異常を解析することが可能になっています。これからは、がん細胞の遺伝子異常を把握することは、それぞれの患者さんに対する個別化医療を実施する上で重要と考えられています。当院のオーダーメイド医療部等と連携して、遺伝子情報に基づくがん個別化医療の実践を目指しています。

④ 副作用対策の研究

化学療法には、吐気、脱毛、免疫力低下に伴う感染症など副作用がしばしば伴います。こうした症状を少しでも軽減できるよう副作用対策（支持療法）の研究も行っております。また、副作用における個人差においても、遺伝子情報との関連を検証する研究を行っております。

- ・化学療法中の吐気に関与する因子の研究
- ・化学療法剤による腎障害発症に関する因子の研究

昨年度は、主に②④に関する研究成果を国内外の学会にて公表しました。